



2008. 11. 25

マーク制作: 関知磨子(秋津コミュニティ: 蚊帳の海一座)

(融合研のホームページ) <http://www.yu-go.info/>

(事務局) 〒273-0122 千葉県佐倉市中志津7-17-4 (TEL&FAX) 043-463-1929

本号の内容

○巻頭言: 宮崎稔会長 「学社融合・教育改革をもたらした負(マイナス)の一面

- 1 第12回融合フォーラム in 松山の記録
- 2 第13回融合フォーラム in 厚木(仮称)情報
- 3 融合研「ブライアン・アシュレイさん」講演会報告
- 4 役員会報告
- 5 事務連絡

○10周年記念誌の送付と入金について

○2010年度以降のフォーラム開催の立候補・役員立候補を受け付けます。

巻頭言

学社融合・教育改革をもたらした負(マイナス)の一面

融合研会長 宮崎稔

「体験、体験」「食育、食育」「英語、英語」と、小学校の現場にはたくさんの注文が届いています。そのため、ただでさえ忙しい教師は追い立てられて、しっかりとした考えで計画をする暇もなく、「とりあえず」上記のことをこなしているという状況も、全国のアチコチで起こっているようです。でもそれを見て「ああ、体験している！」と安心している教育学者と言われる人たちもいるようです。

その一方で中身のない学力論争も起きています。だれも「学力とはなにか」を明確に答えている人がいないにも関わらず……。それでも専門家のつもりになって「学力不足はゆゆしき問題だ。」と、教育を語っている肩書きのある多くの人たちがいるのは周知のことです。

また、「今の子どもには自由がない。もっと遊びを！」と声を張り上げている人もいます。学びの自由とはなにか？ 遊びと野放しの違いは何か？ ということについて、きちんと正対しないままに、「子どもにとっての自由」や「遊び」について抽象論で語っている人たちがいます。

今、多くの方が教育に関心を示しています。教育改革や学社融合は、その多くの役割を担いました。そういう「正」の部分があります。でも、見えない「負」の部分があることをしっかりと受け止めてそれにきちんと正対しないと、「良かった。良かった」という戯れ言のオンパレードになる恐れがあるように思います。ここで、教育の現場を知らない人たち(知ったつもりでいる人たち)のために、これまでの学校教育界の努力で得た財産を述べて警鐘としたいと思い、また、

みなさんにもお考えいただく意味で、いくつかの事例を紹介します。現場の先生達は、教育についての様々な問題について、全てをあるいはほとんどについて、きちんと答えることができると思うからです。それだけの実践を積んでいると思うからです。

（事例1）

文科省予算の無駄遣いを撲滅しようというプロジェクトに参加したことがあります。その道では、著名な人たちが委員として集まりました。その中で、

- ①「学習指導要領の作成に〇億円」
- ②その学習指導要領を解説するための「解説書の作成に〇億円」
- ③その解説書の内容を説明するための「講習会の開催に〇億円」

とありました。ある委員から、

「そんなに手厚くしないと先生方には分からないほど、学習指導要領って難しいことが書かれているの？」

ということになり、すぐに学習指導要領を取り寄せました。たまたま開いたページには、「3年生の理科ですが、『じしゃくにはものを引きつける性質があること』と一行だけ」が記載されていました。そうして、「えっ、たったこれだけのことを教えるのに解説書が必要なの？講習会をする必要があるの？日本の先生の能力って、そんなに低いの？」と続けました。

（事例2）

上記の内容を理解させるために、あなたは以下のどの指導方法を選びますか？

- ①「いいか、じしゃくにはものを引きつける性質があるんだぞ。」と何度も言う指導。
- ②先生が、磁石と釘を子どもの前に持参して、「いいか、よく見ていなさい。磁石にはものを引きつける性質があるから、付けてみるぞ。」と示範してみせる指導。
- ③上記のように示範したあとに、「みんなもやってみよう。」と一人一人に磁石を渡して確かめさせる指導。
- ④一人一人に磁石を渡して、「さあ、どんなものが磁石に付いて、どんなものが付かないかを実験してみよう。」と課題を提示して子どもに活動を促す指導。

さあ、どれにしましたか？

教師の間では、いずれもノー！！こんな指導では子どもに学力はつかない、と厳しく指導されて

しまいます。しかし、学力テストではどれでも「○」をとるでしょう。教育評論家や文教族と言われる人たちにも○をつけてもらえるかもしれませんが、プロの教育界はそんなに甘くないのです。

（事例3）

では、学校ではどのように授業をしようとしているのでしょうか。

教師達は、事前に様々に考えて授業に臨みます。その一例です。

- ①この内容は、「**磁石は**、ものを引きつけることがあること」というように読み取り、「磁石の性質を学ぶこと」なのか？それとも、「**ものには**、磁石につくものがあること」というように、「磁石を通して（手段）ものの性質を学ばせるという物質観」を教えることなのか。
- ②だったら、どんな磁石を使ったらよいのか？
 - ・普通の棒型磁石がよいのか
 - ・U型（馬蹄形）にするか

- ・ 黒板やスチール金具に付いていて身近にある小さな丸いフェライト磁石がよいか
- ・ いやいや強力な力を持つアルニコ磁石なら、子どもの興味を呼びそうだ
- ・ U型磁石では、付けるという事にのみ集中してしまう。それにN極とS極が釘でつながったりして形の面白さに目が行ってしまうので、磁石の性質に発展しないことがある。
- ・ それに、N極とS極で逆の性質を持っているということには気付きにくいのではないか。
- ・ アルニコという強い力の磁石では、たくさんの鉄が付いて興味が沸くだろう。それが子どもの発達に相応しいと考える。
- ・ いやいや、それではたくさん付くことに学習の目が行ってしまい、活動が粗くなって小さな力でも鉄が付くという磁力の不思議には気付きにくいのではないか。
- ・ じしゃく遊びの中から、必然的に性質に目がいくようにしなければ「学び」にはならない。
- ・ 教え込まなくても次の活動に**発展**するようにしなければ問題発見能力が身に付かず、「教材」とは言えない。
- ・ フェライト磁石では、どこからN極でどこからがS極なのか分かりにくい。付くということだけで終わってしまう。
- ・ 棒磁石なら、両端（極）が一番強くて、だんだん中央に行くに連れて力が弱くなるという磁力についても見つけることができる。
- ・ それに、磁石同士を付けたりする子も出てきて、吸引と反発による極の違いにも問題意識が生まれるのではないか？等々を考えて、どれにするかを決断します。

（事例4）

授業が終わると検討（反省）をします。ほとんどの授業は個人でおこないますが、時には他の教師や指導主事などにも授業を見てもらって、一緒に話し合うこともあります。もちろん経験のある教師は、過去の経験から以下のようなことを事前にも検討してから臨んでいます、その一部を紹介します。

○例えば、磁石ではどんなことができるだろうかという学習で、教師から「机の中にも付くものがあるかな？」と投げかけた場面が問題になったことがある。

・ 「机の中にも付くものがあるかな？」と言ったのは、子どもの活動の自由度を狭めていることに

なるのではないか。

- ・ いや、言わなければ活動的ではない子は何をしたらよいか分からずに、ウロウロしているだけになっただろう。
- ・ それでもいいじゃないか。友達の様子を見ていて必要が出てきたら動き出すだろうから。それが子どもに選択の意思決定力をつけることになると思うよ。
- ・ それよりも、動き出さなかったらどんな支援をするつもりだったのか。その想定はあったのか？
- ・ しばらく様子を見ていて、○○の状況だったら△△の支援をする予定だった。
- ・ いやあ、その想定じゃ甘いよ。だって、・・・。

○また、誰かの良い発見があったときに子どもの活動をストップさせて、みんなを集めて紹介したという場面では、

- ・ あれは良かったのかな。
- ・ 気づかない子が多くいた。全員に試してもらうことで、全ての子に磁石の微妙な性質にも気づかせたかったからです。

- ・それは子どもが発見したということに名を借りた教師の引っ張りではないか。もっと自由に遊ばせていけば、自分から発見する子も増えたのではないか。
- ・自分で発見したという経験こそが、子どもの学ぶ意欲や勉強は楽しいという充実感につながるんだよ。知識を教え込まれたって、楽しくないよ。
- ・では、どんなタイミングなら良かったんだろう。・・・

この様にして、教師は子どもが**自分から分かっていくように**授業を仕組んでいるのです。決して大人の知っている知識の一部を切り売りして教え込んでいるのではないのです。だから、教師のこういう研究によって、子どもは「自由の中で」「主体性を持って」学習をしているのです。野放しとは全く違う「自由」の中で、磁石の「遊び」という「体験」をしながら、「学力」をつけようとしているのが学校教育なのです。冒頭の「子どもにもっと自由を」「もっと遊びを」「もっと学力を」と言っている人たちは、こういうことをどれ程踏まえて教育改革を語っているのでしょうか？

もしかしたら、教育については素人だという会員の中には、こういう教師の日常の努力に感心している人もいるかもしれない。しかし私の経験でさえ、こんなことは教師の間ではもう数十年も前から日常茶飯事のことなのです。当たり前の議論であり、それをどう実践するかという方法の検討が常に行われているのが「先生たち」なのです。こういうことを国語でも算数でも・・・、毎時間続けているので、だから「教師は忙しい」のです。

でも、教師は黙っています。私はそこが問題なのだと思います。**語らないから**、教育の、そして子どもの認識プロセスを知らない人が、いかにも「学力は！」「体験は！」「遊びは！」という**こと**で教育を語り、施策をコロコロと変更してしまっているのです。

最近、福祉や建築や環境等々に関わる人たちも教育にすこぶる関心を示され、それが閉ざされてきた教育界という批判とも相まって、社会もそういう畑違いの(?)人たちからの多面的な考えを受け入れようとする傾向があります。しかし彼らは、その道では名前は売れていても、教育ではしょせん素人なのです(ただしここでは、素人を軽蔑するための論ではないことをあらかじめ断っておきます)。教育改革の名の下に、何も知らないそういう素人に、いわば教育現場を荒らされていても**黙っている教師の方が問題なのではないでしょうか。**

わたしは、「立ち上がれ、教育のプロである教師よ！！」と言いたいのです。

(事例5)

これと類似の状況にもよく出くわすようになりました。それは、地域のボランティアの方々との実践や話し合いの場です。退職して増えた時間は、こういう人たちとの語らいの中から多くのことを学ばせていただいています。

「放課後子ども教室」における地域のおばちゃん(失礼)は、偉そうな学者よりも余程子どものことを知っています。顔色一つで子どものことを見抜く目を持っている人も多くいて、そういう人たちが子どもについて語るときは白熱して醍醐味があります。実践に裏付けられた事実があるからでしょう。

また、活動に参加する子の中には、日常の家庭教育では、教え込むだけの「しつけ」や「指導」が教育であると勘違いしたままの親に育てられた子も少なくありません。そのような親は、生徒として過ごした学校時代では、そういう教師に教わって来たのかも知れません。しかし、親のし

つけいかに拘わらず、地域のおばちゃんやおじちゃんは、子どもの内面にピッタリと来る「自由」を保証する「遊びの体験」をさせているのです。自らは実践をせず、それでいて教育についての「聞きかじり」や他人の実践を借りてきて理屈をこねくり回して、いかにももっともらしく言っているだけのエライ先生とは違うのです。でも、そういう学者に群がったり、お墨付きをもらったりする社会教育の担当者もいるのです。地域の人との接点があり、教育の両輪である社会「教育」の担当者は、真の「自由」や「主体性」について語れる努力をしないで、行事をこなすだけのものになってはいけないということに気づかなければいけないと思います。だから本当は、地域の実践的な活動家こそ教育改革や体験についてを語る資格があるのではないかと思います。

学社融合や教育改革論議は、多くの人に教育について考える道を開きました。と同時に、多くの似非（えせ）教育者も生み出し、これまで学校教育の担当者（教師）が培ってきた教育的理論や財産をなき物にするような無用の教育変革に繋がってしまったように思えてなりません。そのマイナス面についてもしっかりと正対しないと、声の大きな人やその取り巻きによってねじ曲げられてしまう恐れがあります。教員には、「教育とは」「子どもとは」ということについて、もっと語りもっと発信してもらうこと、そして社会教育はその参加者を増やして、子どもという素晴らしい財産を学びという視点から基調にして、学社融合が推進できる道を探って欲しいものです。

私事ですが、私は11月から社会教育の場に出ました。学校教育で得た「教育とは」「子どもとは」「自由とは」「主体性とは」等々の理論と、「放課後こども教室」で教えてもらった「体験」や「遊び」から見える子どもの不断の姿を基調にした社会教育をするために……。そして、実践に裏付けられたホンモノの学社融合を研究し、誰もが参加するまちづくりを推進するために……。そこで、これまで浮ついた教育評論家になりかかっていた自分を捨てて、地域に密着した実践をしたいと考えているからです。

そういう自分に気づかせてくれた、多様な職種、多様な個性を持っている人がいる融合研に感謝すると共に、貴重な会なのだなあと改めて思っています。

1 第12回融合フォーラム in 松山の記録

8月2～3日にわたって開催された「第12回融合フォーラム in 松山」の詳細をお送りします。

○第1分科会 議事録

(作成者) 井上・大崎

◆いっしょに笑えば応援団

野澤 桂子（宮城仙台市立名坂小学校教諭）

1. はじめに

教師歴20年、現在4年学年主任、美術専門。

学校は5年目の新設校、地域自体も新しく子ども会もない。すべてが0からの出発。

2. 弟子入り体験

総合学習としての「弟子入り体験」3年目。

子ども100数人が3人組で1カ所へ。

今年のテーマ『いっしょに作ろう』（9/4～5）

- 1回目 ⇒ 仲良くなる。
- 2回目 ⇒ 何か考えていく。
- 3回目 ⇒ 終了後作文発表「大きくなったら・・・夢」。夢破れたとき、（近所のおじ

さ

んに聞いてもらったなあ）と振り返る、地域のつながりが生きる。

3. とことん実行委員会

自分の得たものを子どもに配ってみたい。

美術館で体験会。学芸員・一般公募の子ども・アーティスト・美術系学生等が参加。

アートの見方、ふれあい、図工教材の検討、ダンボールカ士でどこどこ相撲、流木アート、川の流れをせき止めてみよう。

4. 参加者より

杉林さん（愛媛大学美術教員・「とことん実行委員会」メンバー）

『とんとんぎこぎこ図工の時間』映画上映から野澤先生と知り合う。

大学教員・社会教育・学芸員等々、立場を超えて話ができる。

子どもをダシに経験して、子どもたちにフィードバックさせたい。

小学生～大学生を対象にさまざまな企画を。

教師が「子どもといっしょに育つ視点」を持って、ちゃんと子どもに向き合っているのか。

5. 生まれてきたもの

学校ではPRのみ。

地域の人が2回目を期待。同僚が「自分にもやれる」。後輩が手伝いをしたい。

⇒ 活動の継続につながっている。

6. 質疑応答

Q：片上さん（発表者）

野澤さんの熱意が学校・地域に広がった？

A：「総合学習」という枠がよかった。発表時、地域の人を呼ぶ。

普段は校門を閉ざしている。厳しい受付。

地域や弟子入りの受け入れの人など、外部の人がたくさん学校に来るようになった。

「よかった」とほめられて帰る ⇒ 教師もうれしい ⇒ 開かれていく。

点が面になっていった。

Q：宮崎さん（発表者）

なにか苦労は？

A：地域探検で地域の歴史を学んだ。

子どもは退屈する。

何を学ぶかより、地域の中で「だれから学ぶか」。

弟子入りして地域の歴史を調べてくる。

校長はドキドキしているだろう。

企画書は出すが、校長はわからないかもしれない。

弟子入り先がないときも、地域の人が紹介してくれる。

危ないところもあるが、結果オーライ、気楽にやろう！勇気を出して！

◆地域から愛される信頼される学校《開かれた学校づくりを通して》

片上 公典（松山市立椿小学校校長）

1. 学校経営の基本方針

内発的動機付けの重視

学社融合で開かれた学校

- 愛される学校作り
2. 学社融合で開かれた学校
設備の開放
保護者・地域の人との協力と参加。意志形成。教育責任の共有化
 3. 開かれた学校のポイント・問題に強い学校作りのために
教職員の意識改革 ⇒ 情緒的・牧歌的から脱却するチャンス。中教審答申の理念・制度が改革されているので、変わらざるをえない。
内発的動機付けによって主体的に動ける
⇒ 教職員の意識改革を促す外発的刺激（学校評価・教育改革）
制度（学校評価）が変われば、教職員の意識が変わる。
 4. 学社融合について
学校教育と学校外教育の相反する特性（P. 72 下表）を十分理解し、メリットととらえていくことが大事。
ポイント1：子どもを育てるために大人は何をしなければならないか。
ポイント2：学校は地域に対して何ができるのか。
 5. 実践例（愛媛県南宇和郡愛南町久良小学校）
年3回、参観日などに地域の人をパネリストにしてシンポジウムを開催。（P. 74）
教員にはない発想の意見が多数。家庭数の倍の人数が参加。
成果 ⇒ 教員の意識が変わる。保護者・地域の人の意識も変わる。
来校者・参観者が増える。貴重な情報が得られる。
教員も地域へ出て行く。名前・顔を覚えられる。
課題 ⇒ マンネリ化。人選の難しさ。
管理職は地域と質の高い交流をしておく。
第三者をパネリストに。
テーマ設定は時代に応じて。
形態を工夫する。
 6. 学校関係者評価委員会
H14年 自己評価とその公表 ⇒ 努力義務
H20年 自己評価の実施、公表 ⇒ 義務化
意見
家庭学習・社会体育・教師間格差・人権同和
教職員の能力アップは校長のリーダーシップ
学校に関係の少ない人も来ることのできる機会を
成果
学校評価が客観的になり、学校運営が向上
教職員の意識改革
教職員と地域の人との人間関係向上
委員の学校作りへの参画意識
課題
分析結果が難解 ⇒ 誰にでもわかりやすいシンプルなものに
委員研修が必要
学校評議員との重複を避ける
メンバーの入れ替え
 7. おわりに
学校だけでは何もできない。
学校・地域・社会は手を取り合わなければならない。
学社融合が必要。
地域の者が地域の子どもの育てるという意識。
教職員は転勤していなくなるが、地域の人はずっと住み続けるから。

◆ モンスターのその後、そしてその後

宮崎 稔（千葉県佐倉市・大学非常勤講師・元小学校校長）

1. はじめに
元校長、今は地域のおじさん。
職場と住居が離れていたため、地域の声が良く聞こえてきた。
学校の努力不足を感じる。
自身は日本一幸せな校長、職員も日本一楽な先生だった。
2. どんなモンスターがいたか
A小学校 新興住宅地。学歴の高い親が自分の子どものことばかり言う。
子どもも成績のことばかり。イジメ・不登校。
職員会議になだれ込んでくる親たちが学社融合によって変わった。
B小学校 不審者が多い。
C小学校 旧市街と新市街の分断した学校。
3. A小学校 「地域と学校」（ビデオ鑑賞）
地域の人日頃の姿を公表することで理解が出てきた。（先生たち一生懸命やっているじゃないか）
クラブ活動を地域の人が指導。（いいところに引っ越してきたな）
何もできなくても、ニコニコ見守る人も人材。
活動教室の管理も、鍵を渡して地域の人が自主的に行う。教育委員会を動かした。運動会も学社融合 ⇒ 昔のコミュニティがなくなった今、地域の人と知り合える場。
教師の側から、モンスターペアレントを遠ざけていた場合もある。
成果 ⇒ 不登校0。中高生の居場所ができた。子育て中の人との相談。サラリーマン世代の仲間作り。高齢者の生きがい。教師の負担が減る。行政の予算が0でも、材料を持ち込んで「ゴロゴロ図書館」ができた。
子どもたちだけでなく、大人も喜ぶ。
4. B小学校
地域とPTAがパトロール（先生は教材研究をやって！パトロールは私たちがするから）
お互いの機能を理解して協力する。
黄色い腕章
家を出るときは常につける。フルタイムで働く親も、駅を降りたらつける。土日もつけて出かける。できるときにやればいい。無理しない。
腕章仲間の連帯感が生まれる。不審者が0に。無理せず、長続きする活動を。
放課後の学校開放
PTAが子どもを見守るから遊び場を一緒につくる。
8月「花火をしよう」 ⇒ 翌日役員が片付けていた。理解ある校長を困らせないように。
被害者だけでなく、加害者も出さないように。
引きこもりやスポイルされている子に手を差し伸べて。
地域のつながりができて心が通う。
5. C小学校
学校評議員が、どちらの地域が多いかという低レベルだった。
焼き芋会 ⇒ 廃材を薪割り。6年生になるまで斧は使わせない。下級生のあこがれ。
大人がやると制約が多くなりがち。地域の人がやると気楽。大人がいきいきしたアイデアが出せる。サンマを焼いてもOK。
冒険山 ⇒ 高齢で子どものためになにもできないので、山を自由に使ってほしい。PTAが整備して遊び場に。
学社融合はまちづくりにつながる。
課題 ⇒ 楽しい経験も、校長の転勤で閉鎖的になったり、今までとやりかたが変わる。
学校こそ権力をふりかざしてモンスターだ！

学社融合の良さを知った人に対して、さらにより実践をしていかなければならない。
教員は肝に銘じて努力を。

◆ まとめ

Q : 白松さん

「弟子入り体験」によって、子どもや教師の地域との関係の変化は？

A : 野澤さん

中学生でキャリア体験、職場体験。

友だちが行ったところへ自分も行きたいと、自主的に弟子入りした例。

Q : 引き受け先として困るのは？

A : 手に職のある人に弟子入りさせたくない。本当はごく普通の人のところに行かせたい。

「キャリア体験」のため、引き受け事業所も多い。小学校は、働く体験よりも、近所にこんな人がある、こんなことしたよ、というふれあいをするのが目的。

宮崎さん

地域の顔役がねじ込んでくる。（学校にしてやっているんだから、学校もやってくれ！）

担任の判断は無理。管理職が対応。

去年も来たから今年も来るはず、と思う人がある。善意の押し付け、必要ない、子どもも行きたくない場合に困る。

白松さん

学生を学校現場に押し付けている。

片上さん

校長が変わったときがチャンス。

校長が嫌われものになる必要がある。

宮崎さん

学校応援団として扱う。リボンをつけて来賓として何でも招待する。

「今年の出番はないけど、大事に思っていますよ」というメッセージ敵は作らない。

白松さん

今のタイムスケジュールでは教師はきつい。その中でどう地域の人や子どもと向き合うか。

いっしょに悩んだりする時間。学校ではできないことは社会教育へ投げる。

宮崎さん

校長は暇なので、毎日HPを更新した。ブログで学校内の様子を紹介。動画で保護者は喜ぶ。
単身赴任者、海外からでもアクセスして見られる。

授業の見方も合わせて提示し、教師の意図を知ってもらう。

失敗も隠さず伝える。

自分の子どものクラスだけでなく、他の学年も見られるので、先生の評判も上がる。

P T Aは、教員のことをほめてうまく付き合う。

校長は管理の目的でしていたことではあった。

片上さん

放課後の使い方は学校のジレンマ。

池田小事件以降、安全が優先され放課後活動が制限される。

週に何日かは地域の人が協力する。下校時間以外でも、子どもたちの安全を守るように。

Q : 松山市立伊台小学校 P T A 会長

P の立場で学社融合している例は？

A : 宮崎さん

P T A が学社融合の核。

地域の間人であり、学校のことわかり、6年は在籍する組織を持っている。

子どもの安全を P T A から声かけしていく。P T A もやるから地域もお願い。

モ : 「モノづくり」が苦手な若い教師に手助けを。

ス：スポーツを手伝って。

パ：パソコン事業の補助

「私やりますよ！」と声をかける。あくまでも先生のプライドを大切に。自分の子どものクラスには入らない。

A：片上さん

P T AがPの活動中心になっている。Tがよくない。P T AならPとTが半分ずついていいはず。

「先生方は忙しいからいいですよ」とは言わない。

PとTの融合から始めること。

Pの活動をTが知らないということはまずい。

土日の活動、おやじの会など、休みの日に出てきているのだからTも休みに出てもいいのでは？

A：宮崎さん

「先生は勤務地のP T Aではなく、居住地のP T Aをやってよ！」と地域の人から声が出るように働きかけを。

TがPに協力して無理が行かないように。

ノルマを課すと嫌がっていたが、いつでもいい行けたらいい、とすると「行けます」という反応も。

司会（山下さん）

松山市立たちばな小学校「やるっこクラブ」

学校開放、近所の畑で野菜作り。地域活動からP T Aが引き継いだ。

運営資金は「子ども夢基金」、P T A会費は使えない。

野澤さん

弟子入り先をさがすとき、一人で30件探すより、P T Aの30人が探してくれたら助かる。家庭科室のミシンが古く、糸が絡まる。教師でも対応できるが、親が手伝ってくれると助かる。校長が学社融合の窓口ではない。教師と地域のつながりが大事。

白松さん

トラブルはつきもの。何かあっても解決していける。地域が助けてくれる。

×：〇〇先生の問題だね、そうさそうさ！

〇： " 、でもいいところあるよ！

石橋をたたく人は渡らない。

子どもが楽しいこと、校長をバックアップしてほしい。

片上さんの学校評価は、学社融合につなげていく真摯な姿。

文科省の評価基準にはプラス採点がない。

いじめ調査は、マイナス項目ばかり。「笑顔があるクラスか」等、プラス思考の項目を増やす。

情報公開をプラスプラスで。

コーチング ⇒ 否定語で指示しない。プラスαの言葉で指示していく。

クレームを言う人はハイエネルギー。「別に・・・」という人は取っ掛かりがない。

クレームを言う人はわかりやすい人と捉える。エネルギーをどう処理してあげるか。

最後に感謝の言葉が出ることが大事。感情と感動を共有する。誰かが苦しんでいるものは×。

問題に強い ⇒ 話し合うことができるか。（手がかからない「いい子」は「いい子」を必死に演じている。子どもが小さいうちに手がかかるほうがよい。15歳も過ぎると、子どもの体力についていけない。）

PとTの連携 ⇒ お互いの短所を踏まえて、補いあうことが大切。学校は、何ができないか、恐れすぎている。短所は開示したほうが楽。

短所を改善しようとするとうつましい。責めたり自信をなくしてしまう。

長所を活用する関係が大切。

○第2分科会 議事録

(作成者) 西岡・岡本

◆私と学社融合 関 福生 (愛媛県新居浜市教育委員会社会教育課副課長・社会教育主事)

1. はじめに
新居浜には18の地域があるが、まだまだ学社融合の考えが広がっていない。
公民館から、役所・学校・警察の人はただの仕事をしてきているだけではないかといわれたことがきっかけで、地域の方とのかかわりを大切にするようになった。
2. 新居浜市での関わりの中で見えてきたもの
新居浜市では、公民館が担ってきた地域作りを学校と協力して行うようになってきた。
子どもたちと学校と地域をうまくつなげていけばよいのではないか。
地域の中には、なかなか前に進むことができず、学校とのかかわりを持ってない所もあるのが現状である。
その現状を少しでも前向きに進めるために、いろいろなことを実践している。
3. 小学校での実践
放課後子ども教室の実施。
小学校の中に塩田を作り、地域の方との協力の中、子どもと地域のつながりを強める取り組みも行っている。
地域とPTAの協力で、見守り活動を行う。初めは衝突も多々あった。
4. 中学校での実践
中学校・高校にも地域の中に入ってきてもらう努力。
地域の大人たちの中で、子どもとしての意見を言うことで、大人(地域の方)に影響をもたらすようになった。
5. 高校での実践
クラブ活動をもとに、社会との接点をもつようになる。
地域からも高校生に役割を与えることで、良い関係を築いている。

◆ 地域再生のころみ～「だがしや楽校」を通じて

田中 靖子 (神奈川県横浜市・NPO法人教育支援協会 地域教育支援担

当)

1. 横浜市の放課後の現状
放課後の居場所づくり事業「はまっ子ふれあいスクール」
子どもたちにとって、放課後の居場所がなくなっている今、子どもたちに自由な時間と遊ぶ仲間と、安全な空間を保障してやる。
2. だがしや楽校
昔だがしやが果たしていた居場所を取り戻す。
一対一の対面方式のよさ。
子どもたちが集い遊ぶ仲間を増やす。
子どもたちには、お客さんになるばかりでなく、店の仕事を与える。
横浜市では、2004年から地域子ども教室事業のひとつとして、「だがしや楽校」を開催。
小学校では、地域に開かれた特色ある学校作りができ、中・高校では、ボランティア活動の推進になる。
参加した人が体験することによって意識が変わっていく。
地域の人、PTAの人が、いろいろな店を開き、子どもたちが参加する。
学校でも家庭でもない地域での体験。
人とのかかわり、自然とのかかわり、物とのかかわりが、地域での放課後の役割。
「だがしや楽校」を開いてみるには、みんながワクワクする企画を考え、グループを作り、グループの連合体を作る。やりたいことをやらせる。
3. 子どものまわりの学校教育・家庭教育
学校教育 ⇒ 知識習得・集団生活・規律を教える。

家庭教育 ⇒ 生活すること、暮らす技術を教える。

◆ 地域を元気にする／公民館元気倍増計画

竹村 奉文（松山市教育委員会地域学習振興課課長）

1. 学社融合のメリット ⇒ 子育て支援
児童クラブ ⇒ 子どもたちの安全を守る。
放課後子ども教室 ⇒ 平成19年から始まった。勉強をするのが主。ボランティア力による。地域活動の衰退によるボランティア力の衰退。
学校と社会の間の見えない壁によって阻まれるものがある。
2. これからの公民館
地域の互助（助け合い）機能の向上、住民の自立心を高める役割になっていかなければならない。
公民館活動とPTA活動の関係が変わってきた。
松山市は新しい公民館作りに取り組んでいる
 - ・ 楽しい公民館
 - ・ ためになる公民館
 - ・ あってよかった公民館
 - ・ みんなの公民館学社融合のコツは、子どもたちを中心にもっていくこと。
松山市のコミュニティセンターとは？純粋に公民館でいきたい。他県のようなコミュニティセンターに取って代わるつもりはない。

◆ まとめ コーディネーター 渡辺 喜久さん

3人の発表を聞いて、一つ一つの実践の積み重ねが学社融合につながっていくと実感。

学社融合の課題

- ・ 教職員の意識の転換
- ・ 行政職員の意識の転換
- ・ P T Aの意識の転換
- ・ 外部講師
- ・ 学校開放
- ・ 地域のあり方

参画 ⇒ 子どもたちを企画から参加させる

拡大 ⇒ 中高生に広める

交流 ⇒ 地域との交流

活用 ⇒ 中高生の部活動を活用（公民館のパソコン教室など）

井之頭中学校の取り組み

もう一歩先を見据えて、社会教育と学校教育の融合を考えていくことが大切である。

○ **第3分科会 議事録**

（作成者）入船・徳永

◆ MACネットシステム～緊急情報連絡網の構築と学社融合への可能性～

西川 暁（松山市小中学校PTA連合会前事務局長）

1. はじめに
 - H16年 所轄の警察署より、不審者情報を取得（152件）
 - H18年 携帯電話に関するアンケート実施・MACネットシステムの稼働開始
 - H19年 不審者情報80件に
 - H20年 91校中85校で活用中・約22000件の登録

2. 不審者情報以外の用途での活用例
 学年別・クラス別などのグループを作り、学校からの連絡に活用
 地域の方の登録も可能
 ポスターを大手スーパー・銀行などに貼ってもらい活動を広く周知
 各携帯ショップでも登録サポート
 防災訓練で活用
3. 来年度へ向けて
 出生児～未就学児の子育て支援に役立てる。
 育児相談や相談窓口の紹介等に活用

◆ 地域と共に守る、学校の安全

地域ぐるみの安全ネットワーク～「セーフティ道後」をめざして

藤岡 和人（愛媛県松山市立道後小学校 生徒指導主事・安全教育担当）

1. 学校の実態
 児童800名
 町中で家が多く、古い町並み、道が狭く周囲が見えにくい地域。
 年に何回か校区内での不審者情報あり
2. 組織の設置
 学校安全推進委員会（年3回開催）
 安全教育部会 ⇒ 安全教育年間指導計画の作成・実施、安全学習授業の実施、読み物などの資料の作成、啓発活動
 防犯活動部会 ⇒ 見守り隊、安全マップの作成、メールの活用
 地域連携部会 ⇒ 校内安全ネットワーク体制の構築、「セーフティ道後」の発行（年5回程度）、「まもる君の家」との連携
3. 安全教育部会
各学年に合わせた活動・子どもたち自身の安全に対する意識の高まり
 2年生 ⇒ 安全な登下校などを習う。ロールプレイングで実践学習。「いかのおすし」を活用
 5年生 ⇒ 一人で留守番、エレベーターでの危険などの対処方法について話し合い、自分で自分を守ることを学ぶ。
 その他 ⇒ 安全を考える参観日（警察関係者・スクールガードリーダー・交通安全指導員・少年補導員・地域安全ボランティア・大学生ボランティア）
 子どもの対面の場を設ける。安全に関する劇・クイズ
安全ノート
 夏季休業中に家族一緒に危険な場所を見つけて作成。それをクラスでまとめて「安全マップ」を作成することで、危険な目に遭わないよう意識つけることができた。
地域への啓発活動
 標語募集（全校生・保護者・校区の中学生・幼稚園）
 「まちのひと みんなぼくらの まもるくん」
 「うれしいな 近所の人や さしい目」
 「つくろうよ 笑顔であいさつ 明るい地域」
 「おはようが 地域を守る 合い（愛）言葉」
4. 防犯活動
 来校者は色分けしたIDカードを使用する。
 見守り隊は地域の回覧板などで呼びかけて参加を促したことにより、新しい参加もあった。
 H19年2月より、愛媛大学「守るんジャー」による見守り活動。
 大学生はおやじの会ともつながりをもって学校行事にも参加
 大阪池田小学校へ視察（7名）

5. 地域連携部会

「セーフティ道後」記念講演会 本郷紀宏氏（大阪池田小で犠牲になった優希ちゃんの父親）

どんなに強く願っても、失われた命は戻らない。危機意識のアンテナをさび付かせることなく、子どもたちの安全に真剣に取り組み地域や学校にあった独自の施策を考え、具体的な行動に移していく」

6. 成果と課題

地域の関係者・学生・子ども見守り隊・警察・学校からの連絡体制が整い、地域ぐるみの安全ネットワークの構築に効果があった。

学校安全の取り組みを継続させるために、予算はPTAが便宜を図ることにした。

できるだけ効果的な取り組みは無理なく継続させたい。

◆ 今、子どもが危ないー危機の構造と処方箋

石附弘（日本市民安全学会会長・元長崎県警本部長・厚木市セーフティコミュニティ専門委員）

1. はじめに

いろいろな人に助けられて自分は幸せである、これを次の世代に伝えたい。

「危険なくしては人は成長しなくなる」（コーカサスのことわざ）

いろいろな事件が起きたのはなぜかをみんなで考え、危険を回避する知恵を、大人も子どもも持つこと。子どもを加害者にも被害者にもしないように。

2. 非行から見た加害者

親のモラルが低い、放任、過保護、親が未成熟

今回の会に参加してくれる意識のある親ならば大丈夫。来ない親をどのように普通の親にするか。

親の責任を考えよう。

最近では地域社会が無関心。学校における教育力・指導力の低下。

携帯電話・インターネットの普及、映像の氾濫。

3. 負のエネルギーの発散をどうするか

子どもが素直でなくなった。本心を見せなくなった。子どもの変化がわかりにくい。

⇒ じっくりと子どもを見て接してやる。

食事を食べない。親の都合で外食するなど。コンビニ弁当（自己中心的になりやすくなる）

⇒ 何でも食べてまんべんなく栄養を取るようにするといきなり型爆発などは少なくなる。キレる子どもにしないために、子どものときから心豊かな生活を。（美しいものに触れる、ゆったりした心で過ごす、楽しい気持ちになる）

4. 子どもの2つのジャングル

① 場所的空間の危険と安全（暗い所など）

② サイバー空間の危険と安全（心の闇）

危険に気付き予知できるためには、危険に対し洗練された感受性や感覚（安全センス）が大切である。

出会い系サイトなど携帯中毒になっている子どもが多い。一度配信された画像は、1つ消してもいつまでもどこかで流通している。大変危険なことを理解しよう。

5. 地域コミュニティ

秋津コミュニティは30年か嘗て構築された。地域の取り組み、家庭教育関係との連携で行われている。

子どもたちのために、豊かな教育とよい場所を確保してほしい。

◆ まとめ

宮内さん（松山市教育支援センター前総括相談官）

教育支援センターへの相談内容 ⇒ 携帯画像・メールトラブルの相談が主流に。

親がしっかり見守ること。

支援センターでは、裏サイトの発見などに力を入れている。

Q：MACネットシステムを利用した子育て支援の予定は？

A：10月に提言する予定（CSC）。市民団体を主体にして、行政と連携して信頼性のある機関にしたい。

Q：「守るんジャー」はなぜ、道後小学校での活動なのか？学習支援も行っているのか？

A：近隣の学校では受け入れられなかったが、人のつながりがある道後小で受け入れてもらった。教員希望の学生で構成し、学習支援・特別支援・放課後支援をしている。

「レンゴキッズ」⇒放課後3年生対象

おやじの会・キャンプ・運動会などの学校行事に関わっている。

石附さん

あいさつは安全そのもの。自分で安全を見直すきっかけになる。

生活の安全センスの学習は生活実践から。

お金で買えない安全の質と環境を考える。

見えないものを大切にすることとどう子どもたちに教えるのかを大人が考えなければならぬ。

「家は買えても家庭は買えない。薬は買えても健康は買えない。」

宮内さん

保護者が地域の方とのパイプ役になること。

町別の小さな集団で話し合う機会を持つこと。

地域振興は学校のあり方にかかっている。

○第4分科会 議事録

（作成者）角田敏郎・長島道子

コーディネーター：櫃本 真幸（愛媛大学医学部付属病院 医療福祉センター長）

発表者：①藤尾 智子（紫波町役場産業部農林課 食育主幹）

②松本 真弓（松山市双葉小学校PTA副会長）

鴨頭 裕子（家庭教育部長）

③西宮 京子（あい幼稚園／松山市北条）

参加者：93名

実践発表(1)地域が生きる食育(藤尾智子)

・岩手県の中央に位置する紫波町…もち米、小麦、リンゴ、ブドウ(家畜との複合型農業)

・新世紀未来宣言(町長発:平成12年)…環境、循環型社会の構築

・食育

17年 食育の部屋

18年 食育推進計画 …内閣府のホームページにも紹介

5つの柱 ①意識を高める

②子どもたちを中心に

③歴史文化を伝える

④健康

⑤循環型農業の推進

・学校給食への取組

大豆づくり…キャリア教育の一環

米 …有機肥料100%

野菜 …給食食材供給組合(平成12年)との連携

無農薬 農家の愛情…洗浄に時間がかかる

給食センターのおばさんが、農家の取材・・・ホームページで紹介

・大豆づくり

教師の発案から・・・農家は、単なる体験活動を拒否。除草、収穫も。

職員会議でたいへんな思いだった。

学校・・・農業体験から人生観を学ぶ授業へと

農家・・・仕事、人手として(3,500人分の納豆×2回分)

(質疑応答)

榎本: トップダウンで行われていることか?

藤尾: 「未来宣言」は、トップダウン。しかし、町に意思がなければできない。

榎本: 太っているのも、朝ごはんを食べさせていないのも、本人・家庭が悪いという行政が多い中
珍しい。型通りの食育推進計画かと思っていたが、とんでもなかった。

実践発表(2) 双葉みそ～親子でみそづくり(松本真弓・鴨頭裕子)

(松本)

・4年前に家庭教育部長をした。主な仕事は、PTA学級の企画運営。

・コミュニケーションをテーマに家庭教育を再考したいと考えていた。

・臨床心理士によるコミュニケーション講座を開催したが、思いには届かない。

・親子料理教室を開催した。

・料理を通じて簡単にコミュニケーションが繋がった。

・味噌造りを夏休みに実施、地域のおじいちゃんやおばあちゃんも参加。

・みその感触、「あの味噌は、どうなっているのか？」など家庭での会話につながる。

・子どもの見守り活動で地域のおじいちゃん、おばあちゃんと子どもたちの会話につながる。

(鴨頭)

・20年度から前部長(松本さん)の志を引き継ぎ部長になった。

・味噌づくりのPTA学級が、近隣のPTA、学校、公民館関係者が参加する形に広がった。

・ジュニアマイスター(小学生リーダー)の育成につながった。

・味噌づくりは、人の心を丸く、やさしくする和気あいの穏やかな時間

・食材についての講座(中村会長)を実施。

生産者の気持ち、先人の知恵に思いをはせる。野菜のにおい命は、食でつながっている。

食卓が充実していると、幸せな記憶として残る。

なんでも食べることができれば、より幸せな人生を送ることができる。

(質疑応答)

榎本: 会場に参加された方は、いますか?

越智: 雄郡小学校のPTAです。わくわくするような体験をさせていただき感謝している。

自分の学校でもやりたい。

校長: 双葉小学校では、食育を5年生でやっている。5年生が下級生を指導して味噌づくりを

指導する。また、「双葉っこまつり」の参画につながっている。

味噌づくりから子どもたちの主体的な活動へと広がっている。

榎本: 大豆は、購入したのか? 原料から作れば、一貫した教育になるのではないか?

栽培することから始められれば、素晴らしい。食文化の原点として伝えたい。

地域と連携して、作ればどうか?

鴨頭: 麴は、自分たちでつくっている。

中村: 連続小説の5話をみて、おもしろかったから1話から見たいと思ったらいい。

食に関心を持つことで、愛情や感謝が育ってくればよい。

櫃本：教師の参加を呼びかけては？

松本：そこに、先生が入るのはおかしい。PTA学級の位置づけ。先生は、校務に専念すべき。

櫃本：学校・PTAの狙いが、共有されている。参加者も狙いを分かっているといい。

校長のリーダーシップか？

校長：PTAのリーダーが、仕掛け人。家庭の味噌づくりにはつながらなくても、いろいろなことを通して、食べることへの気持ちが変わることが、変わることが大切。

櫃本：手段に振り回されることなく、目的を共有しているのが、いい。

実践発表(3)五感で味わおう！～365日の食育(西宮京子)

- ・松山の端にある周りが、自然にあふれた私立保育園を運営している。
- ・今の子どもの幸せな姿？将来の子どもたちの幸せな姿？
 - ・お母さんは、どちらを望みますか？
- ・自然と関わって生きる力を培うことが目標
- ・子どもたちは、栽培したものを食べることにしている。
 - ・幼児も「五感を通じて、生きることの元になるものをつくる」という信念。(イベントではない)
- ・食生活が整っていない。(コンビニ層が多い)→ 我慢できない子ども
- ・子どもの育ちを3年のスパンで考える。
- ・一人一鉢の野菜作り、土づくり・たい肥作りから草むしり
- ・近所の農家にも協力をお願いしている。→ 感謝・お手伝い
- ・干し柿づくり → 渋柿に語りかける
- ・本物の包丁での「ままごと」
- ・お泊まり保育 → 自立
- ・負の体験も取り除かない。
- ・手間ひまかけて心をこめる作業から自尊感情が育っていく。
- ・種イモの切り方が悪いと芽が出ない → なぜを自分で確かめる → 生きる力
- ・遊びの中で学んでいくこと → 知育
- ・食育の後ろ側に大きな目的がある。

(質疑応答)

櫃本：入園する方は、取組を理解しているのか？

西宮：もちろんです

櫃本：地域や家族の協力の受け皿がすごい。

西宮：地域へのお返しは、必ずする。地域の方が、園に出入りする。

松本：この子どもたちが、そのまま大きくなったらコミュニケーション講座は必要ない。

櫃本：ブレずに継続されるといい。

西宮：学校に行けない子どもを園に来させた。しばらくすると学校に行くようになった。

まとめ(櫃本真津)

- ・医療崩壊が進んで、ひどい状況 → 地域の力が必要
- ・学校、家庭とともに生きる力につながる学習が必要
- ・発表事例には、すべてコミュニケーションスキルがある。
- ・継続性を分断すると伝わらない → 地に着いた活動
- ・狙いと目的の共有が必要
- ・未来の子ども像を本音で議論し、共有する場面がない → 食が目的ではない

- ・現在の状況・問題点を明確にすること → 原動力
- ・専門家は、一方からしか見ていない場合が多い → みんなが知恵を出すことが大切
- ・先生は、学校の仕事をしてほしい → 家庭・学校・地域の役割を再認識
- ・学校にサロン・・・保護者や地域の人が気軽にきて、話し合える場所
- ・指導ではなく、持っている力を引き出す →モチベーションアップ
- ・親が、環境を探す(自助に頼る)のではなく → ネットワークを作る
- ・志の後継者をつくっていくこと
- ・情報を外に発信していくことで、内に理解者が増える

大崎: あい幼稚園から双葉小学校へすすみ、紫波町で暮らすと完璧だと思う。

松山市: 教育と福祉の連携がない。手をつなぎたい。行政は、移動のたびに担当者が変わる。

櫃本: 地域と行政がうまくつながって効果を上げていくとよい

角田: 行政の縦割りは、仕組みのうえで必要なこと。うまくつないでいくコーディネーターが必要
できないことはない。

○第5分科会 議事録

(作成者) 永原・石橋

◆秋津の秘密 佐竹 正実 (融合研千葉支部事務局長・秋津コミュニティ運営委員)

1. 秋津のビデオ紹介

秋津コミュニティの活動紹介

地域の人と子どもの触れ合いが伝わってくる。

子どもだけではできない経験をさせてくれる団体。生涯学習の団体。

秋津小学校との交流。

大人が学習する場を学校の中に持ってきた(次世代の子どもたちのために)

⇒ 学校を使って子どもとの交流を深めたい。しかし、鍵の問題、管理の問題、学校と社会の融合を広げていくことが願いである。

2. 秋津コミュニティの活動

地域の方が教える教室が多い(水彩画教室など)

子縁 ⇒ 大人の癒しの場になっている。

楽しい空間に大人や子どもが集まり、楽しい場所になっている。

大人が学習する行為を学校に持ってきたところがおもしろい。

「自主・自立・自己管理」は秋津コミュニティの中で育んできた考え方。

ボランティアという形でいろいろなことをしており、学校ではあまりデメリットはない。

子どもが大人の姿を見て、さらに何かを学んだり、感じたりしている。

インフォーマルに地域住民の生涯学習や子どもとの出会いを演出する、秋津コミュニティ!

◆おやじの底力

佐川 良 (松山市立椿小学校おやじの会会長・うどん部長)

1. 椿小おやじの会

2001年に2人で発足、現在8年目。

会報年3回発行。

PTAに属さず、有志ができる時にできる事をする。

子どもたちと一緒に遊び、大人のメタボ対策。

2. 年間行事

月1回 「あそびクラブ」

夏休み 「おやじの会キャンプ」 ⇒ 学校では体験できないことをする。そうめん流しの準備を子どもたちで。

9月 「運動会」 ⇒ 準備・テント立て・片付け・警備

11月 「椿小フェスティバル」 ⇒ ツイストパン作り。おやじの会唯一の収入源。

秋の地方祭 「みこし」

3. おやじの底力

おやじの会に卒業はない。

毎年会長を交代して、マンネリ化しないようカラーを変えていく。

お母さんには優しさがあるように、父親は威厳、頼りになる、力強い等、子どもたちに教えるのではなく伝えることで、みんなで楽しんでいく。

◆ 子どもと関わり、地域がつながる森の里「PTAの底力」

青木 信二（融合研神奈川支部長・厚木市森の里中学校PTAパートナー

隊）

1. はじめに

≪キーワード≫ 「つなぐ」「まなぶ」「けいぞく」

森の里地区 ⇒ 小学校・中学校・高校・大学があり、住宅地とともに企業の研究所が誘致されている。

地域活動に中学生が参加する。部活がある生徒は自分たちで工夫して参加している。

2. PTAの組織改革

地域活動委員会

父親委員会

PTAパートナー隊

3. 森七ネットワーク会議の設立

つなぐ ⇒ 地域・学校・PTA

まなぶ ⇒ 新たな実践

けいぞく ⇒ 情報交換

4. 防災訓練テント宿泊

地域側も、学校側もお互い利点があれば問題ない。

グランドキャンプ・防災訓練・学校開放がWIN&WINの関係。

5. ふれあい喫茶

小学校の余裕教室を利用＋学校教育に役立つ（戦争・方言と共通語・昔の暮らし・植物の育て方・オカリナ教室）

6. 学校から新たな提案

ふれあいの時間を増やそう。

クラブ活用に展開したい。

7. まとめ

児童と高齢者や地域の方とのふれあいに、もっと活用しようという思いが強くなった。

森の里では、今ある活動を活かしながら、点と点を結び、新たな線、新たな面にしてきた。

負担なく活動の幅を広げ、有意義でやりがいのある活動に一步步前進する。

◆ まとめ

Q：宮本さん（千葉県）

中学生にどう呼びかけたのか。どんな反応だったのか。

A：子どもたちの面倒は、地域で見なければならぬ。大変なのは自分たちである。

Q：内容について

A：子どもたちに多くの問題が発生。地域の人たちとも話し合いが必要。

Q：矢吹さん（東京都）

おやじの会の地域への広げ方は？

A：地域から始まったものではなく、後から地域がついてきた。今後も地域に溶け込んで活動しようと考えている。

Q：これから活動しようとしている内容は？

A：検討中

佐竹さん

クラブ活動の協力員として学校へ行ったことがきっかけとなった。図書にかかわりたかった。学校に行くのが楽しい。

Q：前田さん（徳島県）

学校の先生が迷惑がっていないか。

A：一切なかった。

スクールコミュニティ

狭義の学社融合 ⇒ 学校の使用200日／1年

広義の学社融合 ⇒ 休校 165日／1年、36%使っていない。

学校の財産・資産の開拓

幼少期の子育ち・子育てが将来へつながる。防災・防犯にもつながる。生きる力にもなる。

○第6分科会 議事録

（作成者）小林・高橋

◆地域の中で育つ一作業所の設立から現在 中村 知子（愛媛県今治市・NPO法人麦の穂）

1. はじめに

ダウン症の子どもが生まれたときの不安

「小中学校を共に過ごした中はずっと友だち」との思いから、地域でダウン症の子どもを育てることを決意。

2. 実践内容

サイコロクラブ（1999年）

手をつなぐ親の会。レクリエーション中心。

私たちは一人ではない、支えてくれる人がいる。

サイコロ会（1999年）

サイコロ作業所（2001年）

無認可の小規模作業所

地域で、利用者2名、指導者2名でスタート

パン工房「麦の穂」（2003年）

設立資金1000万円

賛助会員や企業からの寄付などの援助

NPO法人「麦の穂」（2007年）

予約販売・出張販売・移動販売・店頭販売 ⇒ 1日6～7万円の売り上げ

障害の程度や実態を見据えて個を生かす支援体制

時間のけじめをつけ、作業意識を高める。 ⇒ タイムカード。休憩・昼休みはタイマー片手。仕事が終わったらコーヒータイム

時給制（100～350円の4段階。早朝＋100円）

感謝祭「パン祭り」

小学校親子パン教室。地域に対してお返ししていく。

入社式として、地域の方に祝っていただく。

3. 5年たって思うこと

地域に働く場があるということは、障害を持った人が、この町でいきいき暮らしたいという夢をかなえること。

「めざせパン職人」仕事は人をたゆまず成長させる。

地域全体に心のバリアフリーの広がり。

4. 現在

障害者自立支援法により2000万円の予算で増改築。

賃金倍増計画で、月収50000円を目指す。

5. おわりに

夢を持って夢を育ててほしい。

たいへんなこともいろいろあるが、作業所の運営を続けることで、障害をもつ子どもが仕事を通じて成長する姿を見ることは、親にとってとても大きな喜び。

◆みんなちがってみんないい

車 育子（秋津コミュニティ副会長・「秋津・地域であそぼう！」世話役）

1. 秋津小学校コミュニティ

15:30～17:00の活動

最初から、お金がなくてもやっていける、やっていくことを想定して運営している。

高校生がお手伝い。

いろいろな子がくるが、ボーダーラインの子は取り残されてしまう。ひとつのことに集中できない子には、別のこと（折り紙など）をしてもらう。

2. 子どもたちとのかかわり

時間はかかるが、子どもにはやりとげる力がある。

おじさん、おばさんがいることで、世間話ができる。親との関わりだけでなく、地域との関わりがあると、一方的にならない。

隣には障害児の施設があるため、日々コミュニケーションをとることができる。

お祭りやパトロール等の行事を一緒にしたり、日常的に作業所のクッキーなどのおやつをかうことができる。

3. 自然に人と人とが混ざり合う

5年連続不登校ゼロ、いじめゼロ。いじめの初期段階で発見。

秋津祭りはすべて住民が作る、行政に頼らない、助け合うことが当たり前と思っている。

お父さんたちが学校に通ってくれる。

土日ハイキング。校庭でパン焼き。一泊キャンプ。

子どもを評価しない地域の大人がいることで、子どもの等身大の姿を見ることができし、等身大の子どもとの付き合いができる。

学校・地域と一緒に考える。

学校の中に親がウヨウヨいる。

親も自立している。使う人が住人であるため、「自分の学習の場」を与えられたと考えている。

野澤さん

6%の子どもが何らかの障害があるといわれている。

その対応は、学校だけでは大変困難で、地域と保護者の協力が必要な時代。

◆ 不登校、引きこもりのことを地域や学校はどうとらえるべきでしょう

谷本 圭吾（味酒心療内科・精神保健福祉士）

1. はじめに

毎月100名の新規患者（年間1200名）、内1割が不登校や引きこもり。

医療で治そうとして、子どもが親に引っ張られて来院する。子どもの話を聞こうとしても親が入りたがる。

フリースクール開設（平成8年より）、子どもは自分を否定的にとらえて苦しんでいる。

当時のフリースクールに来ていた子どもが27～30歳の大人になっている。

2. 患者事例

中2A君、お母さん（うつ病）が同時に入院。

お母さんとの依存関係が強すぎたケース。

通信教育で卒業後、公務員に。フリースクールのOB会を作り活動中。
学校に行けなかったことで、自分を否定しないで欲しい。学校がすべてではない。

3. 「強迫性障害」「アスペルガー症候群」
汚れていることを非常に気にする、白黒はっきりさせないと気が済まない等でコミュニケーションが取れない子どもたちは、全体の6%程度いるのではないか。
社会として、学校として、発達障害への許容が必要な時代。
4. まとめ
最近の子どもは、バーチャルの世界を生きている。
迎えてくれる喜びがある「NPO法人どんまい」
人とのつながり、ぬくもりを不登校やひきこもりの人は求めている。
親が子どもを追い込んでいく現状がある。

◆ まとめ

Q：活動の妨げになっていると感じていることは？

中村さん

A：地域に障害を受け入れる学校がなかったこと。

周りの人に理解してもらうことが必要。

障害児の親と子が声を上げていかなければならない。

地域の中で働いて生きることが普通と思わなければならない。

地域の中で受け入れてもらえるかどうか、不安の中で、周りの目を気にしながら生きてきた。
仲間同士で、「夢はかなう、かなわないのは願う心が弱いから」と励ましあいながらやってきた。

谷本さん

A：小→中→高→大→仕事というステップから外れることへの親子の不安。

親も子も焦って努力をする。子どもも自分を責める。それを親が見て絶望する。

「不登校・引きこもり」が「既成のステップから外れたこと」としてのレッテルになる、
「回り道」と認めない、想像できない世の中の風潮。

社会から外れてしまっても、価値観は一通りではない。

接する機会のなかった人たちからすると、付き合ってみる、接してみることで、何も私たちと変わらないと実感していくことができるのでは。（違う価値観を共有する）

Q：どのようにかかわればいいのか一緒にいればわかる？

車さん

A：「愛」の反対は「無関心」。小さいときから混ざり合って触れ合っていれば、何に悩んでいるのか分かりあえる。

本来の姿を見せていくことが大事。

話だけの理解では、血や肉にならない。

理解し合える仲間を増やしていく、作っていくことが大切。

Q：子どもがふれあう場面は？

中村さん

A：地域や学校で、健常児と障害をもつ子どもと一緒に過ごすことで、お互いが仲間として付き合える。（バスの中やパン工房、成人式で）

心のバリアフリーの実現。

Q：社会の中で偏見をなくしていくには？

倫理法人会

A：教育基本法の改正に道徳が入っていないのは問題では？

草の根的な活動では時間がかかる。もっと文科省がイニシアティブをとり老人・中年・親・学校への意識改革が必要。

学校ではもっと道德教育に力を入れて欲しい。この場に学校の先生がいないのはおかしい。

谷本さん

今回の障害者自立支援法で3種の障害（知的・身体・精神）が一括りになった。それぞれに「福祉」と「医療」の名の下に隔離をしてきた。

地域の中で、みんなで一緒に暮らすために何ができるのか、何が必要なのかを考えていこう。

車さん

学校の先生は転勤がある。その期間で校長や先生が地域に何ができるのか。

教師は常に子どもたちを評価し、転勤する。

地域の中でいいものを残していくためには、地域の中で同じことを継承していく、自分たちでやる。

野澤さん

それぞれの立場で、それぞれの思いを持って、それぞれが頑張る。

地域の中でそれぞれが認められ、必要とされて協力し合える仲間作り。

大人も子どもも楽しんで、居場所を作る。

パネルディスカッション議事録

（作成者）山本・上原・松本

| | |
|----------------|-----------------------------|
| ◆全体進行&コーディネーター | 矢吹 正徳（日本教育新聞報道部長） |
| ◆第1分科会コーディネーター | 白松 賢（愛媛大学教育学部准教授） |
| ◆第2分科会コーディネーター | 渡辺 喜久（融合研副会長・静岡県芝川中学校長） |
| ◆第3分科会コーディネーター | 宮内 正民（松山市教育支援センター前総括相談官） |
| ◆第4分科会コーディネーター | 樫本 真幸（愛媛大学医学部附属病院医療福祉センター） |
| ◆第5分科会コーディネーター | 岸 裕司（融合研副会長・習志野市秋津コミュニティ顧問） |
| ◆第6分科会コーディネーター | 野澤 令照（融合研副会長・仙台市教育委員会） |

第1分科会

白松さん

- ・ 野澤さんの発表について（いっしょに笑えば応援団）
現職教員の体験から、担任一人の力で育てるより、たくさんの人で育てること、地域のどんな人でも弟子入りできるという事例。
- ・ 片上さんの発表について（地域から愛され信頼される学校～開かれた学校づくりを通して～）
地域に校長先生が出かけていくことが大切。
- ・ 宮崎さんの発表について（モンスターのその後、そしてその後）
モンスターペアレンツは先生が作り出しているのではないか。
先生が学校の様子を毎日HPで更新する等、保護者と先生の関係が大事。
地域に出かけられる先生であってほしい。
管理職が変わることで校内の活動が変わる。

第2分科会

渡辺さん

- ・ 学社融合について、教師の意識を変えることからやってきた。今日は、本校の研修主任が来ている。教師以外の方が子どもの教育にこんなに真剣に頑張っているんだということを肌で感じ取って欲しい。

研修主任

- ・ 1歳と4歳の子がいるが、自分の子どもを教育するのは、自分ひとりでは無理。幼稚園の先

生、地域のおばあちゃんなど、いろいろな人が関わって育っているのだと思う。地域の子どもにも、学校の子どもにも喜びを還元したい。

矢吹さん

- ・ いろいろ参加されて、変わったことは？

研修主任

- ・ 学校だけの意識でなく、一社会人として、地域の人間として、自分の子どもだけでなく、周りの子どもたちが育っていることが、自分の子どもにも還元されているのだと感じている。

渡辺さん

- ・ 関さんの発表について（私と学社融合）
 - 一生懸命社会教育と学校教育を近づけようとしていることが分かるが、学校が答えてくれない。
 - 小学校では「子どもと関わることに生きがいを感じ、子どもの心に種をまく」活動で、親の顔と子どもの顔が見えてきた。（塩田作り、施設のリニューアル等）
 - 中学校ではなかなか難しいが、地域で子どもたちを見守ること、中学生の実践を少しでも増やしていくことが大切。
 - 高校生は教えられる立場から教える立場になり、自ら活動していくようになる（公民館の取材と広報等）
 - 大学生は、防災や子育てサポーターとしてかかわっている。
- ・ 田中さんの発表について（地域再生のこころみ～「だがしや楽校」を通じて）
 - 生涯教育 is not 教育 but 活動教育ではない、理論に裏付けられた経験と積み重ねられた活動がある。
 - あせらない、あきらめない、あまくみない。
 - 未来の地域は楽しくなければならない。

田中さん

- ・ 「だがしや楽校」は、PTA活動のつまらない企画をいかに楽しくするか、自分の子どもが楽しんでくれる企画か、自分も楽しむことができるかから始まった。
- ・ 生涯学習も走りながら考えていくというものがある。

渡辺さん

- ・ 竹村さんの発表について（地域を元気にする/公民館元気増計画）
 - 松山市300公民館（分館含む）のオンリーワン事業は、たったひとつでいいから活動を、との意。
 - ①楽しい公民館 ②ためになる公民館 ③あってよかった公民館 ④みんなの公民館 4つの柱を立てて取り組んでいこうとしている。
 - 従来はPTA役員経験者が学校と地域との橋渡しをしていたが、現在は、それがなくなっている。
 - 学社融合の取り組みについて、PTAに期待している。
 - 地域作りはリーダー作りから始めなければならない、PTAを卒業してもいろいろな活動に参加してほしい。

第3分科会

宮内さん

- ・ 西川さんの発表について（MACネットシステム～緊急情報連絡網の構築と学社融合への可能性～）
 - MACネットシステム（不審者情報配信システム）H16年からスタート。
 - 不審者情報の配信と、防災、子育て支援情報も配信。
- ・ 藤岡さんの発表について（地域と共に守る、学校の安全 地域ぐるみの安全ネットワーク～「セーフティ道後」をめざして）
 - 安心安全に対する取り組み。子どもたちの意識を高める。
 - まもるんジャー60名（愛媛大学生）の協力を得て道後小学校で活動。

1年間の事業が終わっても、継続できるようにしたい。

- ・ 石附さんの発表について（今、子どもが危ないー危機の構造と処方箋）
危険なくして子どもは育たないが、あまりにも危険が多すぎるのではないか。
サイバー空間（携帯）で子どもを被害者にも加害者にもしたくない。
秋葉原の重大事件のように、欠席なく、優秀な子、あいさつのできる子がなぜ加害者になるのか。
- ・ 安全活力の低下について
日本の子どもは犠牲者、責任は大人にあるのではないか。
IT革命・利便性・携帯中毒 五感・感性をどう育てていくか。
- ・ 地域の安全活力の低下について
互いに支え合うことが大切。

保護者の見えないところで、子どもたちがいじめられている。

保護者自身が積極的に動くべき、顔を出して一緒に活動をしていくことが大事。

第4分科会

櫃本さん

- ・ 朝ごはんを食べない子どもたちをどうしようか、バランスのとれた食事はどうしたらよいかというような専門家主導の議論になるのではなく、自ら食べる、選ぶ力をつける、その中で地域がどうすればいいかという原点に戻る議論ができた。
- ・ 藤尾さんの発表について（地域力が生きる食育）
100年後子どもたちに豊かな農産環境を受け継ぎたい。
食育推進計画を武器に、地域、特に学校をポイントに栽培などの活動を行っている。
生産・加工・消費を地域ぐるみで受け継いでいく、学校給食にも関わっていく。
いざというときの農村の強みと、未来を育てていこうとする大きな資源を感じた。
2～3時間の体験入学ではなく、本物の農業を教えなければならない、地域で子どもたちを育てなければいけないと、大人も育ってきた。
- ・ 双葉小の発表について（双葉みそ「親子でみそ作り」～PTA家庭教育講座より～）
コミュニケーション力をつけようと思ったみそ作りのねらいを、参加者が次第に理解していった。
先生が何でも参加するのでなく、お互いが一緒にやっていく上で、それぞれの役割分担がある。

矢吹さん

- ・ コミュニケーションとみそ作りがどうつながっているかよくわからないが。

松本さん

- ・ 最初はコミュニケーションということしか見ていなかったが、楽しく食育の行事が進んでいるのを見て、これに乗っかってみよう、親子でやったらいいのではないか、会話ははずむのではないかと思った。

矢吹さん

- ・ やっていてよかったことは？

鴨頭さん

- ・ 参加者が増えたことはよかった。味噌の作り方が家とは違うので参加しないという方もいた。
- ・ 地域や公民館にも声をかけ、地域の力になればと思ったが、PTAが外に発信するのはどうかという意見もあり、いろいろな考えがあることを学んだ。
- ・ 食育を通して、豊かな未来、人間性を育むことができればいいと思う。

櫃本さん

- ・ 学校のサロン化がもっとあってもいいのではないか。味噌作りを通して、先生がいなくても学校の中で親子が対話していくという、ねらいを明確にしたサロン化という点では、ひとつのヒントになるのではないか。
- ・ 西宮さんの発表について（五感で味わおう～幼稚園で365日の食育体験～）

あい幼稚園では、五感で味わう、食を通して生きる力を育てることをねらいとしている。園の方針に賛同した保護者が多く、協力体制が整っている。本物を使った近所でできたものを材料として、遊び（ままごと）の中から、親子・地域の人を交え、子どもたちの力をつけていく活動。コミュニケーションから、自立していく子どもたちを実感している。子どもたちにしてあげているつもりが、気がつくと自分が元気をもらっている。子どもたちにエンパワーメントしていることによって、自分がエンパワーメントされているというサイクルがずっと続いている。子どもたちに学び子どもたちに還元する。受け皿（環境）を作ることで、松山にいると健康で幸せになれる。

第5分科会

岸さん

- ・ 佐竹さんの発表について（秋津の秘密）
日常的に、保護者や地域の人が授業に参画し、（学校の下請けでなく）援助をすることで、関わる大人自らが学び、学校がサロン化している。
インフォーマルに地域住民の生涯学習や子どもとの出会いが、学校で演出できている。

矢吹さん

- ・ コミュニティルームを拠点として、具体的にどのようにしているのか。学校に関わっているのか。

佐竹さん

- ・ 余裕教室を4室借りて35～36サークルを形成して各サークルが独立して楽しんで活動している。
- ・ サークルと学校という関係で授業に参加して、学校とつながっている。

会場より

- ・ 学校の中に大人たちが学べる場所が確保してあり、その学びに子どもたちが入ってきて還元されたり、そこで学んだ事が授業に生かされたりすることは？

佐竹さん

- ・ ありえます。

岸さん

- ・ 佐川さんの発表について（おやじの底力）
転勤で松山に来て、うっかり入ってしまったおやじの会（特に会合の後のお酒の会）にはまった。うどん部長として活躍中。
おやじの会の特徴 ⇒ PTA組織外の組織。現在は50数名の会員。
子ども中心で活動しているが、おやじが主役（手作りパンの収入がおやじの会の収入に）
父親たちのロマンが、小学校や子どもの周りでうごめいている。

矢吹さん

- ・ おやじたちは増えているのか？誰がきっかけ？

岸さん

- ・ 6年前に二人で発足。もっと手伝いをしてくれる人がいないかとチラシを配布したのがきっかけ。

矢吹さん

- ・ 会長は毎年交代しているのか？

岸さん

- ・ マンネリ化防止のために、会長は毎年交代している。新しい人になれば、新しいアイデアが出る可能性がある。

矢吹さん

- ・ 飲み会はマンネリ化していない？

岸さん

- ・ 飲み会はマンネリ化させない。飲み会はマンネリ化させてもよい。

矢吹さん

- ・ 大変パワフルな報告で、「おやじが主役だ！」ついてくるのは子どもたち。

岸さん

- ・ 青木さんの発表について（子どもと関わり、地域がつながる森の里「PTAの底力」）
森の里は中学校を拠点として、新住民の小学校と旧住民の小学校が、上手に中学生を媒介して、溶け込むような街作りになっている。
テーマ ①つなぐ ②学ぶ ③継続する
「③継続する」は、PTAでは普通出てこない。「継続する」視点を持っているのは、街づくりや次世代育ての視点を持っている保護者。
保護者は、地域に暮らし続けるという意味において、継続性をもっている。先生との違い。
森の里3大祭り（24年継続）の中で中学生のボランティアを育成していく。
中学校PTAが地域各団体に手紙を出す。「中学生をみんなで見守っていく活動をしたいので、中学生を使うようにしてください」
地域活動委員会・父親委員会・パートナー隊をPTAの中に設けて、学校と地域をつないでいく。
PTAが社会教育団体として機能している。
現在では、森七ネットワーク会議を作り、さらに未来に向けての活動をコーディネートしていく活動をしている。
新しいことを立ち上げていくのではなく、今ある組織同士をつなぎ合わせて融合することによって、新しい価値を持って活性化させていくことは、無理なくできる。

矢吹さん

- ・ PTAの中で「継続する」のは難しいが、どのようにしているのか。

青木さん

- ・ 学校の先生もPTA会長もどんどん代わる、その度に方針が変わっては、地域とつながりができないし、信頼も得られない。やらされている人にとっては、良い事をして負担になる。負担をなくすために、活動の意味を考えていかないと継続はできない。新しい活動ではなく、既存の活動の融合によって、全く新しい価値のある活動に変える。そうすることによって負担なく、楽しい輪が広がっていく。

会場より（北久米小 池澤さん）

- ・ 皆さんがとても熱心で、地域のかかわりも持っている。地域と子どもとのかかわりは大事。

矢吹さん

- ・ 帰って何かしようと思いませんか？

池澤さん

- ・ 役員をしている。なかなか参加してもらえないが、帰って相談しようと思う。

矢吹さん

- ・ 自分も全国子供会連合会の仕事をしている。子供会だけで完結するとなかなか組織が伸びない。ネットワークを作る、既存団体・既存事業と一緒にやってみる。

第6分科会野澤さん

- ・ 学校というひとつの社会の中だけで、仕事をするのではなく、さまざまな立場から物事を見る機会を与えられた幸せに気がついた。融合研で活動をして、いろいろな出会いがあり、いろいろなものを得ている。
- ・ 中村さんの発表について（地域の中で育つ一作業所の設立から現在—）
ダウン症の子どもが小学校へ入学するとき、「ここには、受け入れられる教室はない、別の所へ行ってください。」といわれ愕然とした。
仲間と共に、行政に働きかけ、自分たちの手で切り開いていった。
なんとか地域の学校に通えるようになり、高校卒業後、就労支援の相談をしたら「親が探してください。」といわれ、再び愕然とした。

困ったときに行政は手を差し伸べてくれない、自分でなんとかしようと思い、作業所を作った。

周りの人の協力がたくさん得られた。みなさんのおかげ。

地域で共に育っているのも、障害をもった子どもにも偏見なく当たり前を受け止めてくれる友だちがたくさんいる。どんな立場の人とも一緒に過ごしていけるこの地域で、これからもずっと生きていきたい。

- ・ 車さんの発表について（みんなちがってみんないい）

秋津小校区内には障害者授産施設があり、当たり前のように付き合いができています。お絵かき教室や算数教室を行っている。

文科省の統計によると、6%の子どもたちが軽度の発達障害を含め、さまざまな障害を抱えているというデータがある。

秋津コミュニティでは、すべて子どもたちの個性という考え方をし、どの子にも変わりなく一緒に過ごしている。その子が持って生まれてきた個性を、みんなで受け止めていく中で、お互いが育ちあうことができる。

- ・ 谷本さんの発表について

（不登校、引きこもりのことを地域や家庭はどうとらえるべきでしょう）

不登校の子どもたちをどんどん追い詰めているのは、親のかかわり方。学校に行かない子、行けない子は困った子、いい子ではないという気持ちが親に強いので、子どもを無理やり学校に連れて行こうとする。実はその行動で、子どもは非常に苦しんでしまう。

学校に行ってほしいという大好きな親の願いをかなえられない自分を責め、行き場がなくなり、最後には引きこもったり、親に暴力を振るうようになる。

周りの考え方、「なぜ学校にいかなければならないの？」といった価値観を社会の中で認知していかないと、何も変わらない。

これまでは、不登校や精神障害の人は隔離する社会だったが、ここ十年くらい、社会の中で認めることが広がってきた。これからどんどん広げていくことが大事。

- ・ 地域の中で、どんな人も一緒に暮らしていけることが大切。理屈ではなく、まずは触れ合ってみることから始まる。

車さん

- ・ 秋津小学校の子どもたちは、日頃から障害者の人と関わって、そういう世界を日常的に知っている。文字ではなく、顔と顔、手と手をとってわかっていく環境を造っていくのが大事ではないか。

野澤さん

- ・ いろんな人、いろんな子どもがいて一人一人が輝いている。周りの人のかかわり方でそれを作りあげていくことが確信できた。この空間に一緒にいられることは非常にうれしい。その空気感は、文字ではなく、ふれあいの中でしか伝わらない。

なぜ社会教育は衰退したのか？

宮内さん

- ・ 社会教育は、7、8年前と比べると、ずっと伸びていると思う。校長も教頭も意識は高まってきている。地域の、社会教育をよく知っている人には、物足りないかもしれない。松山市のPTAOBが少ないといわれたが、そんなことはない、私の地域では中心に活動している。

渡辺さん

- ・ やや下降気味かなと感じている。今こそ社会教育が日の目を見る時期では？社会教育も学社融合の中で存在感を示すのなら、アピールする方策を考えていかなければならない。これからはもう一度仕切りなおし、そんな感じ。

矢吹さん

- ・ 社会教育が衰退しているというのは、社会教育養成そのものが手をこまねいているという感じ。なぜかという、地域住民の活動は自主的自発的に多くの活動が生まれているのに、社会教育の方は、自分のところしか見ていない、つなぐということができていない。

櫃本さん

- ・ 医療の立場からいうと、住民に本当のことが伝わらない、知らされていない。もっと声を大にしないといけないのに隠している。昔はお互い助け合う「共助」という世界があったが、「公助」になって、豊かになってきた。社会教育も盛んにやっていたけれども、「共助」がなくなって、いま「自助」になっている。「共助」にもっていくには、住民にそこまでの情報がない。社会教育にしる学社融合にしる大事な時にきている。モチベーションをあげる情報が操作されているところに大きな問題があると思う。社会教育行政だけに委ねたり、教育がどうのこうの言ってもだめ。全部がリンクしていかないといけない。社会教育が頑張っているのに、反応がない。

矢吹さん

- ・ 社会教育でいえば職員が減らされているし、公民館も直営から民間委託みたいな形になってきているので、もともと持っている力・形は失われつつあると思う。それをなんとかしようとするのが、このようにみんながネットワークを組んで、その力をもう一度強くしていこうという意味の学社融合だと思う。

学校が拠点になる活動、学校とつながっていく活動のために、学校はどうすればいいか？

白松さん

- ・ ネットワーク作りにはストロングタイズ（強固なきずな）とウィークタイズ（弱いきずな）の2つある。ストロングタイズを使って、学社融合をしていくといつかつぶれる。一番大事なことは、ストロングタイズを拠点に、ウィークタイズの弱い人間関係をいかに広げていって、その仕事の拠点を、誰かがいなくなっても続けていけるようにすることが大切だと感じている。社会教育の衰退ということを考えたときに、婦人会とか青年団とかの団体が今までストロングタイズで運用されてきてしまい、高齢化で世代交代できないということがあるかもしれない。活動していくときは、いつか世代交代があるということを常に考えていくことが大事だと思う。
- ・ もうひとつウィークタイズの大事さというのは、強い人（保護者のクレームなど）から守ってくれる人が2、3人いたとしても、相手が10人くらいのペアレンツになってしまった場合対応ができない。逆にこちらがそちらの人とつながりがあると、クレームのある人の一人の意見として考えていくことができる。秋津ではそういった取り組みをしてこられたんだと思う。

矢吹さん

- ・ 弱い絆というのは、ゆるやかな人間関係かなととらえたが、ゆるやかな人間関係を放っておいて活動が生まれるのかという疑問が生まれるが？

白松さん

- ・ 若さを武器に、こういうことをやってみたいという先生がいるが、そういう人が大きな努力を振り絞って何かをするときには契機があり、その地域で小さな努力が積み重なって大きな力となり、ドンと動いたりすると思う。小さなことの上に築いていく、蓄積していくことが大事だと思う。共助という話があったが、小さな努力ができる関係を作り上げていくことが、我々にできることだと思う。

岸さん

- ・ 秋津では、組織論と認識論と運動論を大切にしている。7335人住んでいる地域の一人一人をイメージするという。デイリーデモクラシー（日々の民主）を大切にしている。一般論として民主主義は多数決民主主義になっているので、行政はもうだめなんだと感じている。予算がないと何もできない人が行政マン。行政の人でも地域暮らしをしないといけない。行政と地域とを行ったりきたりできるような橋渡しが社会教育であり、生涯学習であると思う。その地域の課題を自らの課題として、自分たちで解決していくことが社会教育であり、生涯学習であると思う。
- ・ 今までは、社会教育は学校教育外と考えられていたが、教育基本法第3条に「あらゆる機会、あらゆる場所で」とある。小学校や中学校であっていいわけで、社会の実現が図られていな

いから、実現しようとしている。学社融合は先駆的に適応できるのではないかと、11年やってきてつくづく感じる。

矢吹さん

- ・ 秋津には、キーパーソンのようなひとがあるからうまく活動できているのではないかと思うが。

宮崎さん

- ・ よく言われるがそんなことはない。「教育は人なり」といわれるが、私は「教育はシステムなり」でなければならないと思う。校長が代わってもシステムは変わらないというシステムを作っていく。それは大人としての生涯学習なんだと考えていけばよい。何かを始めて、途中で校長が代わっても、学校という場で子どもを対象にした生涯学習というシステムとして続けていけばよい。

岸さん

- ・ 社会教育は評価ができてにくい。今日何人参加したというようなレベルしかない。学社融合の4原則の中に、双方で評価するというを入れていく。生涯学習というからには、学んだ成果は何なのか、今のポジションはどこにあるのかという感覚を社会教育は持たないと、衰退という表現からなかなか抜けられないのではないか。
- ・ 社会教育が学校教育から学ぶのは専門性。カリキュラムを作る、目標は何か、達成はどうなっているかといった、学校教育の専門性を、我々一般的な人たちも学ぶべきではないか。社会教育が持っている、いい意味でのやわらかさを、学校教育関係者にも取り入れてもらえれば、肩の荷が折れるのではないか。

矢吹さん

- ・ 学校教育に学ぶことは異論があるかもしれないが、ネットワークの問題や、PTAの重要性・可能性もある。どうやってつなげていくのかを議論したか、活動を通して子どもたちがどんな風に元気になっていったのか、子どもの自主性をどう保障しているのか議論したかった。

地域作りで学校を活性化していく、子どもをもっと元気にしていくためには？

野澤さん

- ・ 歩きながら考える。構築してからやるのではなく、目の前に何か求めるべきものがあつた場合、まず動いてみよう、そこから物がつながっていくと考えている。そのときに一人一人がこの町に住みたい、こんな生き方をしたい、豊かに暮らしたい、子どもたちも豊かに育てたい、その思いを達成するために、何か動きがあればひとつにつながっていくと思う。新しいものを作るのではなく、今あるものをどうつなぐかという発想が大事だと思う。視点を変えてみると、こんなすてきなことをしていたんだなと気付くことがある。それを松山の地でたくさん作ってほしい。

岸さん

- ・ 賢い連れ合いさんの手のひらの上で踊らされている男性、お父さんは上手に踊ってほしい。賢く夫を踊らせてあげてほしい。自分がやりたいことは、必ず旗を掲げて実現してほしい。3人集まったら組織として行動して欲しい。旗揚げする勇気を持ってほしい。

櫃本さん

- ・ 目指す方向をちゃんと持つということがぶれないことにつながる。人だけでなく、環境が大切。ぶれない共通の目標を持つことを提案したい。目標さえ定まれば評価も難しくない。現場の人間が判断力を持っていないので、気がつかない。正しい情報をもっていない、それを実現するには、社会教育が大きな役割を持っている。現場を愛している人たちが情報を伝える必要がある。ぜひ学社融合の中に医療というキーワードを入れてもらいたい。

宮内さん

- ・ 青年団や婦人会など従来からある団体が衰退していく中、PTAだけは衰退しないで残っている。学校は地域のコミュニティの中にあるのだから、PTAがひとつの接点として活動していく団体として重要なところにあると思う。
- ・ 保護者にしても、若い人にも、上下関係の強いものには入りたくない。緩やかなものの中でいろいろなことができる。そういう中で、コミュニティの中で、学校はPTAとどのよ

うにやっていくのかが大きな課題だと思う。お互い頑張っけてやっていかなければならない。

- ・ 昔は公立学校が基盤だったが、松山も私立や中高一貫校が増えたため、地域の子どもとしてとらえる視点が必要。校区外に通っている子どものも一緒に仲間に入れてやっていく活動を考えていかないといけない。PTAが地域の子どもを、地域といっしょに育てましょうということが必要になってくる。

渡辺さん

- ・ 学校の立場からいうと、しっかりやっていきたいことは、経営方針を地域の人たちにしっかり伝えていく、お願いしなくても学校がはっきり見えるような形でやっていくことが必要。特別物がなくても、誰でも学校に入って来られるような学校作り、学社融合室を「融合カフェ」と変えたら、人が増えたような気がする。
- ・ いつも考えていることは、学びの成果・経験の成果を社会に還元できる場を作りたいということ。高齢者の経験なども学校にどんどん取り入れていきたい。

白松さん

- ・ 先生も保護者もそれぞれ頑張っているにも関わらず、教育力が低下したといわれるのは、互いに協力して努力するところが抜け落ちているからだと感じている。もっと楽になる努力の仕方を探ることが学社融合ではないかと思う。お互い短所やできないことがあることを認めただ上で、どこが分担するのかを話し合っていくことが大切。先生と保護者が認め合う関係を作らないと、子どもの短所を学校が認められなくなる。そういう関係を学校と地域で作ってほしい。
- ・ 教育はシステムであるという話があったが、人間味のあるシステムを意識しないといけない。共助のシステム、日本のよさを復興させるかが社会教育だと思う。
- ・ Pの方に言いたいのは、何でこんな活動をとと思われる方が多いと思うが、やっていてよかったということは、時が教えてくれる。社会教育はやっていることはすぐ芽にならないが、子どもたちの心の資産を作るためにやっていると思う。
- ・ 我々が経験して、子どもたちにも経験させたいこと、私たちの大切な思い出をいかに大事にしていくかということ、学校・地域・家庭で話し合いができ、協力の仕方ができれば、同じ方向を向いていけるのではないか。

矢吹さん

- ・ 楽しい活動を作ることが大事だし、他の人たちと一緒にやってみることが大切。そうすることによって地域の課題が見えてくる。そのときに活動を組み替えて活動を継続することが大切。こういう会でひとつでも学んでもらえたらと思う。

松山フォーラムを終えて (11月14日の役員会での意見)

- ・ 現地ではPTAとの共催ということであったので、PTAが中心となって準備等をしていた。このことが、現地の会員がどのようにかかわったらよいかということで、戸惑いがみられた。
- ・ PTAの大会でもあると、どうしても動員という形をとることが多い。そのことが、意識の差が大きく出ることになる。このことは、だからこそ現地の会員の問題意識でもあるので、難しい面がある。
- ・ しかし、少しでも関心が高まったのであれば良しとしないといけないのだろう。
- ・ 2日間の日程にすると、両日とも参加するPTA会員は少なくなる。その中で、2日目に昨日の内容を踏まえたパネルディスカッションをするのは繋がらないという面がある。
- ・ 金銭面では全面的に協力して頂いたので、融合研本部からの持ち出しは無く、たいへん助かった。

2 第13回融合フォーラム in 厚木 (案)

11月12日の厚木フォーラム実行委員会の提案を受けて、11月14日に役員会が開かれました。そして、以下のように、「13回融合フォーラムin厚木」の内容が話し合われました。

○日時について

- ・当初は、9月の5連休を当てる予定であったが、各校の運動会との関連で流動的である。12月中には各学校の予定が出そうなので、それを待って決定したい。
- ・会場として予定している「ニッサン」の研究所は、日曜日しか貸してもらえない。したがって、日曜日の一日に集中して開催出来るような案を考えている。
- ・前日に、「融合研総会」「懇親会(前夜祭)」と、現地の人にとって意味のあるような「ミニ学習会(仮称)」とを組み合わせたい。
- ・厚木の特徴として、これまでの大会以上に「学校の参加(教師も子どもも)」が予測出来る。したがって、日は慎重に決定したい。

○場所について 厚木市森の里「ニッサン研究所」

○内容について 6～7時間の割り振りでおこなう。

- ・10:00～10:20 プロローグ「厚木なりわい節」ジュニア他
 - ・10:20～10:30 開会「実行委員長あいさつ」「会長あいさつ」
 - ・10:30～12:00 基調提案(分科会の代表的事例発表 各20分)
※分科会の趣旨説明も兼ねることが出来る。
 - ・12:00～13:30 昼食及びニッサン研究所内見学
 - ・13:30～15:00 分科会(分科会のレポート2本と研究協議)
 - ・15:00～15:15 休憩
 - ・15:15～16:45 シンポジウム
 - ・16:45～16:50 エピローグ
- 懇親会は、厚木市内で。

●役員会議で出た意見

- ・厚木の良さを出していきたい。とくに、企業との融合や、学校の職員に広がっている会員の輪、またこれまでのミニフォーラムでは子ども達が参加することが多かったこと、また中学校区からの発信ということ等を出したら良い。
- ・都心に近いという交通の便も大きなメリットである。当日の朝に家を出れば会場に到着出来るという会員も多い。日程の工夫は、その面からも意義がある。

※今後、2月6日(金)に、役員会を予定。そこで、全てを決定していく。

3 「ブライアン・アシュレイさん」講演会報告

第2回目の融合研フォーラムで記念講演をしてくださったスウェーデンのブライアン・アシュレイ氏に、10年を経て、改めて地域コミュニティが子育て中の家庭を支援する大切さを講演をいただきました。

学校と地域の融合教育研究会&こども環境学会 2009年千葉プレ大会① 講演会概要報告

講師：ブライアン・アシュレイ (Brian Ashley) 氏

「家庭の支援とこどもの健やかな育ち」開催日：2008(平成20)年10月12日(日)

場 所：千葉県習志野市菊田公民館 講義室

主 催：学校と地域の融合教育研究会

共 催：こども環境学会 2009年千葉大会実行委員会(2009年4月24～26日に千葉県で開催のプレ

千葉大会①)

後援:こども環境学会

通訳:塚本純久氏(武蔵野美術大学・大学院 非常勤講師)

開催主旨

1998(平成10)年8月開催の「学校と地域の融合教育研究会」設立1周年記念フォーラムで、ゲストとして講演をいただいたIPA(子どもの遊ぶ権利のための国際協会)創設者のお一人、ブライアン・アシュレイ氏に、10年を経て、改めて地域コミュニティが子育て中の家庭を支援する大切さを講演いただいた。

I部 ブライアン・アシュレイ氏の講演

Assisting Children's Development through Self-expressive Play

わたしは、子どもや青年、そして地域コミュニティの大人に関わる人材の教育、育成を仕事としてきた長い経験から、いくつかの重要な原則があるということ学びました。

原則1 すべての子ども、青年は、自分の興味、関心を深め、発展させる遊び体験の時間と空間を必要としています。

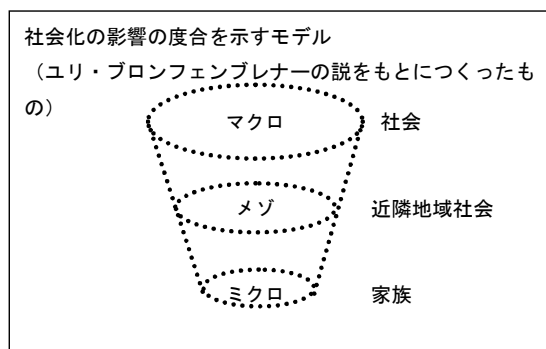
この子ども自身の内面からわきあがる、自らやりたいという気持ちに導かれ、自分の疑問や身の回りの世界の理解を表現することができる遊びは、成長していくどの段階でも、すべての子ども、青年にとって本当に重要なものです。

原則2 原則1で説明した自発的な遊びと教育の世界で子どもに用意する遊びは、種類を分けて定義する必要があります。

教育的な遊びは、教師の子どもを教えるという仕事を助けるものです。この遊びは、子ども自身の内面か

らの欲求、自分の意思による遊びと同じ意味は持ちません。

原則3 保護者、教師、コミュニティワーカーは、子どもが自ら学んだり、自分独自の表現をできる遊びのできる機会を子ども、青年の身近に用意する外部的な条件づくりを進めることが重要です。



原則4 すべての教育関係施設、保育施設、学校、大学が、周囲にある地域コミュニティと交流して情報交換されるよう、オープンな運営を行って地域を支援することが重要です。

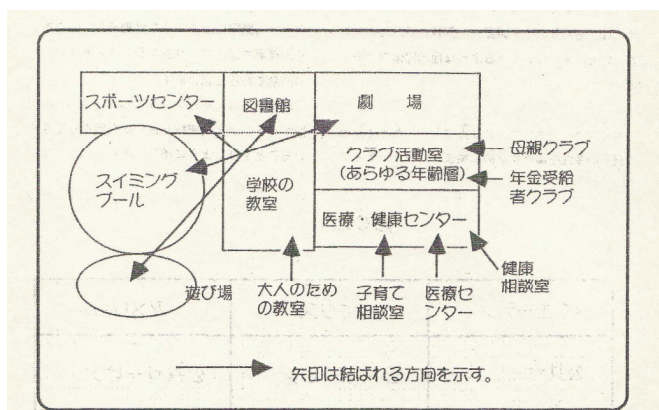
現代の複雑で急速に変化している社会は、伝統的にあった近隣地域社会が維持していた多様な社会的ネットワークを失ってしまいました。そうした近隣社会は、最小単位の家庭・家族と大きな社会を仲介する機能を持っていました。したがって現代社会では、地域コミュニティの中に、住民が出会い、助け合う、そして失われた社会的なネットワークを再構築する新しい手段、手法をさがすことが必要となっています。

現代の学習では知識を獲得するだけでなく、知識を求め獲得するにはどうするのかを学ぶ必要があるということが求められています。現代の学習では、子どもが学びのプロセスに積極的にに関わり、学習の中で沸き起こってきた疑問に対する答えを探さねばなりません。

研究によれば、自分を出発する(自発的な)遊びは、家庭における初期の学習で、特に重要であるとされています。子どもが自分の世界を発見する最初の2歳、3歳の時期に、将来必要な学びや知的発達のすべての概念を獲得するとされています。

幼児が、水辺で泥いじりをしている情景を思い浮かべてください。幼児は大人に指図されることなく、何か調べようと、いろいろな発見をし、何ができるか考えようとします。こうした自らの内面から湧き上がる気持ちによる遊びは、現在の社会が学習で獲得してほしいと考えていることと、まったく同じです。

ブロンフェンブレナーのモデルで、家庭と広範囲な社会を結びつける重要な段階の近隣地域コミュニティが消失したことを説明しました。子どもたちのため、子どもたちの自由な遊びの機会を確保するためには、この近隣地域コミュニティの失った機能を補完しなくてはなりません。その解決には、学校と地域が積極的な交流をする必要があることがわかっています。



そこで、地域の学校をこうした近隣地域コミュニティの多機能な拠点にすべきだと世界を回りながら強調してきました。秋津小学校は、コミュニティスクールのひとつの成功例です。こうした交流する場所は、子どもたち、保護者のすぐそばにあることが重要です。家庭を支援する機能としても近くにあることがたいへん重要です。

質疑

Q: Self-expressive Play と Play は何が違うのか。

A: 1990年のIPA東京大会で「遊び」の定義を議論したときに到達した内容で、「子どもの内面から湧き上がるもので、子ども自身が到達したいという目標、ゴールに向かって進んでいく自発的な行動」としての遊びを、大人の指図で行動する遊びと区別するために使っている用語です。

Q: 日本にはない考え方、コミュニティワーカーとは何か。

A: 地域社会の中でバラバラになっている家庭、個人の間に入っていき近隣地域コミュニティの形成、醸成を手伝い、促進する役の職能。指図するのではなく、いっしょになって行動するのでリーダーではなく、ワーカーと言っている。

II部 ブライアン・アシュレイ氏+木下勇氏（千葉大教授・こども環境学会理事）+宮崎稔氏（学校と地域の融合教育研究会会長）を交えて参加者と意見交換

宮崎: アシュレイ氏の提唱される、学校が近隣コミュニティの活動拠点になるということが、秋津小学校では10年前からできていた。自分は、教頭、校長として関わっていたが、行政(習志野市)は、学校の鍵を先生のいない時間帯にも地域に貸し出すという大きな判断をしてくれた。しかし、こうした実例は、習志野市内でも増えて行かないし、全国的にも多くはない。

ブライアン: 学校を地域の拠点にするという転換を進めるのに重要なのは校長先生や教育関係者の決断です。スコットランドでは、50年間前にコミュニティスクールという方向へ進むことを決めました。理由は、多くの地域サービスを統合的にまとめた方が経費が安いことと、地域住民が頻繁に出入りできるようにすることで、地域の拠点となることが地域施策としても効果的だと判断したからです。

校長先生が多用途な地域拠点の全体マネージャーの立場になるのはたいへんです。自由な活動を許容して自発的、自律的な活動を促すことが必要で、耐性が求められます。

コミュニティスクールは、イングランドでも同じような取り組みが行われています。スウェーデンでは、学校はアカデミックな場所だとされて、こうした地域交流の拠点にはなっていません。

宮崎: 秋津では、記録されている人数だけでも年13,000人のコミュニティルーム利用者がいる。アシュレイ氏のような地域の交流場所だけでなく、学校教育の中に地域住民が授業のお手伝いでたくさん入っている。授業でお世話になったことを覚えている子どもがまちで大人にあいさつをするような、地域全体で子どもたちを育てるという関係までできている。

木下:スウェーデンなどでは、コミュニティワーカー、プレーワーカーの地域住民の活動をコーディネートとする権限が整理されているか。

ブライアン:UK でも日本でもプレーワーカーの働く施設によって待遇がまちまちで、ボランティアに近い扱いでは同じスタッフに継続して長期間、現場に関わってもらうことがむずかしい。

木下:秋津小学校ではプレーワーカーの役割を誰が担ってきたのか。

宮崎:秋津では、地域の大人が全員自分たちのやりたいことを小学校でやっているだけで、子どもたちはその後ろ姿からいっしょにやってみたいと動き出す。特別な人が特別な役割を担ってきたわけではない。

Q:コミュニティづくりは地域で自発的に発生するのを待つべきものか、あるいは、地域に働きかけていくものか。

ブライアン:人間関係をまったく意識していない個人が共通のニーズ、たとえば子育てサークルのような経験からコミュニティ形成を意識していくような自発的な発展もあれば、地方政府が問題ありと考える地域にコミュニティワーカーを送りこんで地域課題に取り組みせる場合と両方ある。

木下:リーダーとワーカーの違いの話題があったが、地域の課題解決は、人がいっしょになって身体を動かして一体感を育てていってつなげていくことが必要。日本では、責任を持って政策提言する役割(コミュニティワーカー、プレーワーカー)を社会の中にきちんと位置づけてきていなかった。今後、こども環境学会でも継続してコミュニティワーカー、プレーワーカーのことを議論していきたいと思います。

[記録作成:榎 重善]

4 役員会報告

○期日 11月14日(金)

○場所 パンゲア

○議題

1. メーリングリストの件

・メーリングリストが、Yahoo!の無料のものが使われているが、これだと迷惑メールも多いので初めから見

ない人もいる。これでは、メーリングリストの意味を出さない。

・支出はあっても、会員が見られるものに変更したらよいのではないか？

※早急に検討し、速やかに対応するようにする。

2. 会費の使い道の件

・10周年記念行事や松山フォーラム等で、予定よりも経費が掛からなかったのも、会計が潤沢である。使い道を考えて欲しい。

・支部や会員の少ないところでの勉強会に積極的に支出したらどうか？

・今は、潤沢といっても今後も継続するとは限らない。慎重に使い道を検討すべきではないか？

・学社融合をしている地域の子どもの意識等を調査した。それに当てたい。

・それは良いことであるが、プログラム研究開発委員会があるので、委員会として取り組むべきだろう

・そのようにする。

※会費の使い道については、会員に諮ったらまだまだ良い意見も出てくるだろうから意見を聞いたらい

3. 10周年記念誌の集金状況について

・記念誌を送付し、何度も催促しても納入しない会員がいる。

・これまでの「資料集」が無料であったことと同一視していて、無料と思っている会員もいるのではない

か？

・再度、催促をしたり、支部や近くの人で納入するように話したりすることで、少しは納入が増えるので

はないか？

4. こども環境学会の全国大会(千葉大会)への後援・共催について

これまで、融合研のフォーラムでは後援をして頂いている。そういう団体には、原則的に同様の申し入れについては引き受けているので、受諾すべきだろう。

※満場一致で、受諾を承認。

4 事務連絡

(1) 10周年記念誌の送付と入金のお願い

5月20日に会員の皆様には「10周年記念誌」を発送させていただきました。

今回の「融合研10周年記念誌」は有償(2000円)です。

同封しました説明書と郵便局の払い込み請求書を確認の上、お振り込みをよろしくお願います。

すでにご入金いただいた方々、ありがとうございます。

(3) 2010年度以降のフォーラム開催の立候補を受け付けます。

2011年度の融合フォーラムは、神奈川県厚木市に内定しています(総会で正式決定します)。それ以後のフォーラム開催について、支部や近隣の人と相談したりして手を挙げてください。

あるいは、自分ひとりだけでもその意向がある方は、「事務局へとりあえず相談」してみてください。

「2012年度以降なら」という地域でも構いません。「今は、まだあまり推進されていないから……」という地域でも結構です。フォーラムを機会に、融合の推進が図られたという地域もごぞいます。どうぞ、奮ってご応募ください。

(4) 2009～2010年度の役員立候補を受け付けます。

一部の役員を除き、多くの役員は、発足以来ほぼ同じメンバーです。会の活性化を図る意味からも新しい血の導入も必要とされています。役員になって融合研を改革したいというご意思のある方は、是非、「事務局まで」意思表示をしてください。お待ちしております。

編集後記(のようなもの)

会報38号をお届けします。今回は、「松山フォーラム」の記録が膨大であったためにページ数が多くなりました。しかし、どの分科会・パネルディスカッションとも内容は読み応えがあります。記録をして、さらにまとめてくださった方のご努力がよくわかります。ありがとうございました。また、ブライアン・アシュレイさんの講演を10年ぶりに聴くことができました。10年を経た今、融合研の実践の確かさが改めて確認出来ました。

来年は、厚木フォーラムです。融合研のこれまでの実践が、企業との連携という視点からも検証されます。多くの参加をお待ちしています。

(M)